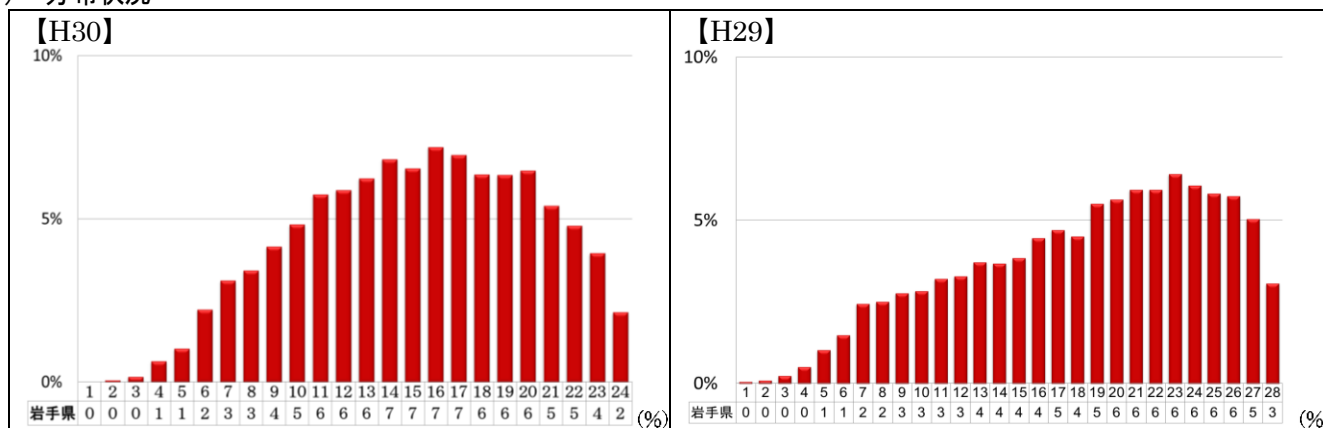


授業改善の手引 中学校第 1 学年英語

1 調査結果

(1) 分布状況



○ 問題数は昨年度より 4 問少ない 24 問。正答数の最頻値は 16 問、平均正答率は 62% です。

(2) 1 年生 CAN-DO リストの項目別正答率

| 領域 | | 1 年生到達目標 (CAN-DO LIST) | | 正答率 | |
|-------|------|-----------------------------------|--|---|------|
| 理解する力 | 聞くこと | ① | 日常生活の身近な単語を正しく聞き取ることができる。 | — | |
| | | ② | 英語のあいさつや簡単な Classroom English など、身近な生活場面で用いる表現を理解することができる。 | — | |
| | | ③ | 簡単な質問や指示、依頼や許可などを聞き、その場面や状況、話し手の意向を理解することができる。 | 94.5 | |
| | | ④ | 自然な口調で話される英語を聞き、その内容を正しく理解することができる。 | 86.2 | |
| | 読むこと | ① | 日常生活の身近な単語や簡単な文を理解することができる。 | — | |
| ② | | 身近にある簡単な掲示や標識等を理解することができる。 | — | | |
| ③ | | メモやタイトルなどから必要な情報を読み取ることができる。 | 76.9 | | |
| ④ | | まとまった内容の英文を読んで、必要な情報を読み取ることができる。 | 74.9 | | |
| ⑤ | | 登場人物の心情や意味・内容が表現されるように音読することができる。 | — | | |
| 表現する力 | 話すこと | やり取り | ① | 日常生活に関する基本的な表現を理解して問答することができる。 | — |
| | | | ② | 人を誘ったり、依頼したり、指示したりすることができる。 | — |
| | | | ③ | 聞いて把握した内容について、問答することができる。 | — |
| | | | ④ | 相手に伝わるように、適切に強勢を置き応答することができる。 | — |
| | 発表 | ① | 自分自身や身近な人々について、考えや気持ち、事実などを、相手意識をもって簡単な英語で伝えることができる。 | — | |
| | | ② | 関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて即興で話すことができる。 | — | |
| | | 書くこと | ① | 英語の書き方のきまりに合わせて、正しく文を書くことができる。 | — |
| | | | ② | 語と語の区切りに注意しながら、英語の正しい語順で書くことができる。 | 39.3 |
| | | | ③ | 自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように、文と文のつながりに注意して、簡単な英文で書くことができる。 (例) 自分自身、家族・友達等の身近な人、お気に入りのものについてなど。 | 49.6 |
| 文字・語彙 | | | | 57.2 | |

(3) 結果概要

- 今年度は、問題を全面的に見直して出題したため、単純に前年度比較はできませんが、「聞くこと」「読むこと」の正答率は高く、指導の成果と考えられます。
- 大問 13・14 は、正答率に落ち込みが見られます。特に大問 13 (小問番号 18) は、新傾向の問題ではあるものの、正答率が 12% となっており、その要因を分析し、指導につなげる必要があります。

岩手県中学1年生 CAN-DOリスト (岩手県中学1年生英語確認調査用)

| 領域 | | 1年生到達目標(CAN-DO LIST) | | |
|-------|-----------------------------------|----------------------|---|--------------------------------|
| 理解する力 | 聞くこと | ① | 日常生活の身近な単語を正しく聞き取ることができる。 | |
| | | ② | 英語のあいさつや簡単なClassroom Englishなど、身近な生活場面で用いる表現を理解することができる。 | |
| | | ③ | 簡単な質問や指示、依頼や許可などを聞き、その場面や状況、話し手の意向を理解することができる。 | |
| | | ④ | 自然な口調で話される英語を聞き、その内容を正しく理解することができる。 | |
| | 読むこと | ① | 日常生活の身近な単語や簡単な文を理解することができる。 | |
| ② | 身近にある簡単な掲示や標識等を理解することができる。 | | | |
| ③ | メモやタイトルなどから必要な情報を読み取ることができる。 | | | |
| ④ | まとまった内容の英文を読んで、必要な情報を読み取ることができる。 | | | |
| ⑤ | 登場人物の心情や意味・内容が表現されるように音読することができる。 | | | |
| 表現する力 | 話すこと | やり取り | ① | 日常生活に関する基本的な表現を理解して問答することができる。 |
| | | | ② | 人を誘ったり、依頼したり、指示したりすることができる。 |
| | | | ③ | 聞いて把握した内容について、問答することができる。 |
| | | | ④ | 相手に伝わるように、適切に強勢を置き応答することができる。 |
| | 発表 | ① | 自分自身や身近な人々について、考えや気持ち、事実などを、相手意識をもって簡単な英語で伝えることができる。 | |
| | | ② | 関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて即興で話すことができる。 | |
| | 書くこと | ① | 英語の書き方のきまりに合わせて、正しく文を書くことができる。 | |
| | | ② | 語と語の区切りに注意しながら、英語の正しい語順で書くことができる。 | |
| | | ③ | 自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように、文と文のつながりに注意して、 簡単な英文 で書くことができる。(例)自分自身、家族・友達等の身近な人、お気に入りのものについてなど。 | |

1年生到達目標(CAN-DO LIST)を支える言語材料等

| | | | |
|-------|-------|--|---|
| 言語材料等 | 音声 | ① | 標準的な英語の発音における母音や子音の音 |
| | | ② | 語と語の連結による音変化 |
| | | ③ | 基本的な強勢やイントネーション、区切り |
| | 文字・語彙 | ① | アルファベットの活字体の大文字・小文字 |
| | | ② | 基本的な語句 |
| | | ③ | 基本的な符号や語の区切りなどの英語の表記法 |
| | | ④ | よく使われる連語や日常的な慣用表現 |
| | 文法事項 | ① | 単文、肯定及び否定の平叙文、肯定及び否定の命令文（現在形、3単現のs、canを含む文） (出題範囲には含まないが1年生で習う事項：現在進行形、一般動詞の過去形) |
| | | ② | 疑問文のうち、動詞で始まるもの、助動詞で始まるもの(Do, Does, Can)、 疑問詞(what, how, when, where, which, who, whose)で始まるもの (出題範囲には含まないが1年生で習う事項：助動詞 Did、疑問詞 why) |
| | | ③ | 文構造「主語＋動詞」「主語＋動詞(be動詞)＋補語(名詞/形容詞)」「 主語＋動詞＋目的語(名詞(句))」 |
| ④ | | 代名詞(人称・指示・疑問・数量を表すもの)、前置詞(場所・時・手段・状況)、名詞の複数形 | |

| | | | |
|-----------|---|-----------------|------------------------------|
| 言語の使用場面の例 | ① | 特有の表現がよく使われる場面 | : 「あいさつ・自己紹介」 |
| | ② | 生徒の身近な暮らしに関わる場面 | : 「家庭での生活・学校での学習や活動」 |
| 言語の働きの例 | ① | コミュニケーションを円滑にする | : 「呼びかける・相づちを打つ、聞き直す、繰り返す」など |
| | ② | 気持ちを伝える | : 「礼を言う・褒める・謝る・感謝する」など |
| | ③ | 情報を伝える | : 「説明する・発表する・描写する」 |
| | ④ | 考えや意図を伝える | : 「申し出る・承諾する・断る」 |
| | ⑤ | 相手の行動を促す | : 「質問する・依頼する」 |

2 指導のポイント

(1) 知識の理解で終わらずに、正しい文構造の英語を用いてコミュニケーションができるようにさせましょう。

ア 問題の概要

11 次の(1)と(2)の対話文について、()内の語(句)をすべて使い、意味がとおるように正しく並べかえ、番号で答えなさい。なお、文の最初にくるべき単語でも、最初の文字を小文字で表しています。

(1) A: Oh, you have a nice bike, Yumi.
B: Yes. (1 my father 2 from 3 it's 4 a present) .

<正答> 3 4 2 1 it's a present from my father (36%)

<主な誤答例>*

3 1 2 4 it's my father from a present (15%)

3 2 1 4 it's from my father a present (12%)

1 3 2 4 my father it's from a present (9%)

※誤答は抽出解答 313 人中の割合

イ 誤答分析

文構造としては比較的単純な[主語+be動詞+名詞]の文を、語句を並べ替えて作る問題です。誤答例を見ると、「it's my father」「from my father」など、過去に授業で行ったコミュニケーション活動で使用した語句は覚えているものの、文全体の構造や、対話の意味を考えずに解答したものと推測されます。

音声言語を用いた活動では、生徒自身が文構造の正確さを意識することは難しいため、「読むこと」「書くこと」といった文字言語を用いた活動の中で意識させ、適宜その定着度を図るための評価を実践することが必要です。

(2) 生徒個々のつまずきの状況を把握し、英語を正しく用いて相手に伝えることができるようにさせましょう。

ア 問題の概要

13 次の(1)と(2)について、あとの例を参考にしながら、()内の語に必要な語を加えて、それぞれの会話が成り立つように英文を完成させなさい。

(2) <昼休みに教室で>

A: Does Kenji speak English well?

B: Yes, (speak) English very well.

<正答例> he speaks , he can speak (12%)

<主な誤答例>*

・主語に関する誤答 “ I speak ” “ speaks (主語無し) ” 等 (29%)

・動詞(3単現のs)に関する誤答 “ he speak ” “ he can speaks ” 等 (13%)

・助動詞に関する誤答 “ he does speak ” 等 (11%)

※誤答は抽出解答 313 人中の割合

イ 誤答分析

★つまずきの要因が多岐にわたると推測されるため、生徒個々の分析が必要です！

・主語に関する誤答 “ I speak ” “ speaks (主語無し)” 等

会話全体の内容を把握し、「誰(何)についての情報のやり取りか」を踏まえて解答することができなかった生徒が、小学校からの活動を通して使用頻度が高い、自分のことを答える「I speak ～」で解答したものと推測されます。ペアで活動する際、第三者を話題とした会話を意図的に増やすこと等の対応が必要です。

・動詞(3単現のs)に関する誤答 “ he speak ”

3人称単数現在時制の知識を理解していないこと、または、理解はしていても、実際に表現する場面でその知識を活用することができていないと推測されます。文法事項は、知識の理解に止まらず、それらを活用して表現する活動を繰り返すことにより、定着が図られます。

・助動詞に関する誤答 “ he does speak ”

Aさんの発話が“Does Kenji ～?”であるため、「Does で尋ねられたら does で答える」ものと判断して解答したと推測されます。文法事項の知識と併せて、常に「内容」を意識して英語で表現する習慣を身に付けさせる必要があります。

(3) 対話の状況や話し手の意図を理解し、適切な表現を用いてコミュニケーションを図ることができるようにさせましょう。

ア 問題の概要

14 次の(1)～(3)のようなとき、英語でどのように言いますか。吹き出しの内容について、英文を書くきまりを守って3語以上の英文で書きなさい。

(3) 教室の床に落ちていたペンが、友達のものか確認したいときに一言。



〈正答例〉 Is this your pen? Is this pen yours? (26%)

〈主な誤答例〉*

- ・場面把握(疑問詞の使用)に関する誤答 “ Whose pen is this? ” 等 (19%)
- ・be動詞の疑問文の語順に関する誤答 “ This is your pen? ” 等 (18%)
- ・be動詞と一般動詞の使用に関する誤答 “ Do you have a pen? ” 等 (3%)
- ・人称代名詞に関する誤答 “ Is this you pen? ” 等 (3%)

※誤答は抽出解答313人中の割合

イ 誤答分析

★つまずきの要因が多岐にわたると推測されるため、生徒個々の分析が必要です！

〈主な誤答例〉のとおり、つまずきの要因が様々予想されるこのような問題では、誤答した生徒個々の解答を分析し、それぞれに対応する必要があります。単純に「正答例の英文を暗記する」だけでは、つまずき自体は何も解消されません。

生徒の学習状況を把握するための調査であるからこそ、今回掲載した(2)、(3)のような個々の対応が大切になってきます。その結果、一人でも多くの生徒が「わかった」「できた」と実感できれば、その誤答は生徒自身の成長のチャンスでもあるのです。